

# 中国武俠小説の「江湖」をめぐる再解釈

Reinterpretations concerning “Jianghu” in Chinese Chivalrous Novels

裴 峰学

PEI Fengxue

**要旨** 「江湖」は中国武俠小説の最も重要な構成要素の一つとして今までこれに関してさまざまな研究が行われてきた。しかしその概念は未だにきわめて曖昧である。本稿では今までの「江湖」に関する多くの研究成果を踏まえて、「江湖」という言葉の意味をまとめながら、そこに新しい解釈を加える。そして、この新しい解釈——「想像としての江湖」——によって、武俠小説というジャンルと「中国人」との「特別な」関係を明らかにし、それこそ武俠小説が中華圏で絶大な人気を博した根本的な原因であることを主張する。

## 1. はじめに

武俠小説とは中国の大衆小説の一種で、江湖という半ば架空の世界を舞台に、武術に長け、義理を重んじる人々を主人公とした小説の総称である。武俠小説における、「俠」とは己の信条に則って正義のために行動しようという精神の在り方であり、そこに手段としての「武」が加わったものが「武俠」である。

近代以降の中国人たちは、近代以前、つまり統合された一つの社会としての古代中国に対する記憶と近代において受けた恥辱の記憶を有する存在であり、さらには、中国人から大陸人、台湾人、香港人及び海外華僑へと至る身分の様々な変化を経験している。武俠小説はこうした中国人の歴史の中で誕生し、ずっと一緒に存在してきた。

1949年、社会主義中国の成立によって、武俠小説は長い間中国大陸で禁書に指定されてきたが、1980年代に入って解禁され再び広範囲に読まれるようになった。愛読者の存在と文学観念の変化によって、大陸の学術界では武俠小説研究の必要性が叫ばれ、武俠小説は正式に文学研究の対象になった。

大衆小説としての武俠小説は、中国人にとって単なる娯楽物や漠然としたユートピアに対する憧憬以上の意味を有すると考えられる。なぜなら、武俠小説は帝国主義の去勢的脅威に対する恐怖の記憶と、伝統的中国に対する憧憬や追憶が相接する時点で誕生したからである<sup>1)</sup>。したがって武俠小説は、帝国主義の暴力的な侵略とともに始まった中国近代の歴史、中国人が直面してきたアイデンティティの変化、中国人たちの共同文化に対するノスタルジアなどによって創り出された「中国人たちの中国に対する想像行為」という観点から捉えうるのである。

本稿では、武俠小説の舞台である「江湖」を中心として、その言葉の起源から、それがどのような過程を経て今日の「江湖」の意味にまで変化してきたかを探りだし、ベネディ

<sup>1)</sup> 林凌翰「文化産業與文化認同一論金庸武俠小説呈顯的殖民地处境」『文化想像與意識形態』、牛津大学出版社、1997年、235頁。

クト・アンダーソンの「想像の共同体」とラカンの「想像界」の概念に基づいて「想像としての江湖」という解釈を提起する。

## 2. 江湖の起源と意味の拡張

### 1) 政治的な記号としての江湖

陳平原によれば、江湖とはそもそも長江と洞庭湖のことで、最初は別の意味を伴わない、単なる地理的な意味を表す言葉であった<sup>2)</sup>。この意味は後に「江河湖海」つまり河と湖の総称へと広がったが、これは春秋時代の范蠡<sup>はんれい</sup>の物語に関する文献との相互対照によって明らかになる。例えば、『史記・貨殖列傳』には、越王の勾踐を補佐して呉国を滅亡させた范蠡が、勝利を収めた勾踐が自分を殺すことを恐れて美女西施と一緒に「扁舟に乗り、江湖を漂った（乃乘扁舟浮于江湖）」と記述されている。また『国語・越語下』には、「小船に乗り、五湖を浮遊したが、結末は誰も知らず（遂乗輕舟、以浮于五湖、莫知其所終極）」と記述されている。陳平原はこれによって江湖が「江河湖海」の意味にまで拡張されたと指摘している。しかし、むしろ重要なのはこの時から江湖という言葉がもはや地理的な意味にとどまらなくなったということである。勾踐の政治的な迫害を避けようと舟に乗って江湖を浮遊したという范蠡の選択は政治的事件の典型的な形態と認識され、後の文人たちの間でクリシェとされるようになった。例えば、高適の「莊生は馬に乗って天地を疾走し、范蠡は舟に乗って江湖を浮遊する（天地莊生馬、江湖范蠡舟）」、杜甫の「病で横たわった江湖客（欹枕江湖客）」、杜牧の「落ちぶれて酒を載せて江湖を回る（落魄江湖行）」などである。これは江湖という概念が政治記号化されたことを示している。こうして江湖には朝廷との対立的な意味が生じたのである<sup>3)</sup>。

ここでの江湖の政治的意味は大きく二つに分けられる。一つは冷酷な政治的論理に支配されない、超越、飄逸、自由の空間という意味であり、もう一つは「国を補佐して民心を安定させる（輔国安民）」という政治的抱負の実現機会が喪失、遮断された空間という意味である。二つの意味は江湖という概念の中に巧みに盛り込まれている。『江湖』によれば、儒家思想の影響を受けた文人たちは、廟堂にいる時は江湖の自由と閑寂さが享受できないし、江湖にいる時は「輔国安民」という抱負が実現できないので、その矛盾を解決するために、「身は廟堂の中にいるが、心は江湖に置く、或は江湖に身を寄せているが、心には廟堂を思う」のごとく解決策を提起する。また江湖に身を寄せている人は意気投合する者に出会って天下のことを話し合うのを楽しんでいるし、朝廷に身が縛られた者は江湖人であると自認することによって精神的な慰安をもとめる<sup>4)</sup>。陳思和は中国古代知識人の政治志向性を説明する時、「隱逸と官位、在野と朝廷、老莊と儒教など、多くの対立的な範疇が知識人たちの巨視的な政治意識の中で高度に統一されている<sup>5)</sup>」と述べた。これは中国文人たちの思考の中で相互対立的とみなされている江湖と廟堂がどのように結び付くのかを明確に説明している。

<sup>2)</sup> 陳平原『千古文人俠客夢』、人民文学出版社、1992年、130頁。

<sup>3)</sup> 同書、130～131頁。

<sup>4)</sup> 陳宏、張旺、陳千里『江湖』、百家出版社、2002年、9～10頁。

<sup>5)</sup> 陳思和『二十世紀中国文学論』、青年社、1995年、139頁。

政治的な意味からすると、江湖は朝廷或いは廟堂という概念の付属物である。すなわち江湖は廟堂に依存しているのである。江湖は廟堂の存在様式と廟堂に対する理解形式によってその性格と意味が定められる。実は、前述の江湖の二つの意味は廟堂の性格から導出されたものである。廟堂が内部の政治的暗闘や腐敗の空間と認識された場合、江湖には当然「超越、飄逸、自由の空間」の意味が与えられるし、廟堂が政治的抱負を実現する立身の空間として認識された場合、江湖の意味は「政治的抱負の実現機会が喪失、遮断された空間」として規定される。

こうした江湖に対する認識と、後に民間社会あるいは民間の通俗文学の中にあらわれる江湖の認識とは大きな差異がみられる。なぜなら、このとき、江湖は中国正統文人たちの思惟の中から導出された一つの政治的記号にすぎなくなるからである。この場合の江湖は、政治的論理を超えた隠者たちの隠遁の場所、あるいは政治的抱負の実現から遥かに遠ざかった一般庶民たちの世界を指している。しかし、この時の江湖においては、凡俗な日常としての空間というよりも、朝廷や廟堂、さらには日常生活では経験できない超越的な精神状態を享有できる空間、精神的慰安や自由を提供する空間といった意味合いのほうが勝っている。

## 2) 俗化された意味としての江湖

先に江湖が「長江」と「洞庭湖」の意味から「江河湖海」の意味にまで拡張されたことについて述べたが、このような過程を通じ、江湖の意味は「天下」を意味するものにまで拡張されることになる。

『江湖』には曹操の「江湖がまだ静かではないので、帝位を渡すわけにはいかぬ。領土を全部獲得した後こそ立ち去れるのだ（江湖未静、不可讓位、至于邑土、可得而辞）」という言葉のように、江湖が「天下」の代わりに使われている例がある<sup>6)</sup>。また『紅線』にも類似した例が見られる。

私は前世男でした。江湖を歩き回りながら神農氏が書いた医書を読み、災害で苦しむ世人を救済しました。

（某前世本男子、歴江湖間、讀神農藥書、救世人災患<sup>7)</sup>）

ここでの江湖も天下という意味を表す。ただし、この二つの「江湖」が意味する天下は日常の世界とは異なる世界である。それは「江湖未静」と表現されたり、「神農藥書、世人災患」などの言葉とともに使用されたりする。つまり、平穏な空間ではなく、危険や災難が常在する混乱の空間、神農の医書すら存在する不思議な空間である。この場合、江湖はどんな事でも起こりうる世界としての空間である。このような江湖は中国人たちの世界認識の表現の一つとしてみなされるが、その世界はまさに混乱と危険、さらには理解不可能な、神秘に満ちた空間である。

江湖という世界に対する認識は曖昧で、抽象的で、包括的であるが、江湖という言葉が

<sup>6)</sup> 陳宏、張旺、陳千里、前掲書、8頁。

<sup>7)</sup> 李昉『太平広記』卷一百九十五 豪俠三。

中国でかなり具体的な指示内容を持って使われたことは決して看過してはならない。江湖は中国で社会の周辺部或いは闇世界に属している者たちの生活様式や活動空間を指す言葉であり、古代から今日に至るまでずっと使われてきた<sup>8)</sup>。今日、江湖は「黒社会（チャイナマフィア）」の隠喩的表現として使われているが、これは古代に由来するものとみなされる。中国古代において江湖という語の使用は常に「遊民集団」と関わっていた。

中国の遊民の主要な構成員は、天災や人災に遭い、生存に必要な土地を失った農民たちであった。彼らは生活の本拠地を失い、各地を流浪しながら延命した。宋代以降、都市経済の繁栄が彼らを都市に引き入れるようになるが、彼らは大道芸、占い、飲食店の従業員など、非定住民として生計を立てながら、都市のどん底で不安定な社会階層、すなわち「都市遊民」と化していた。

こうした都市遊民を中心として「江湖」を解釈するなら、江湖は彼らの主な活動空間、具体的には市井或は都市のどん底などを意味するのである。しかし重要なのは、江湖の実体が「市井」或いは「都市のどん底」であるとしても、「江湖」という言葉はいつもそれ以上のものを含意しているということである。またこの場合の遊民集団とは、緑林党、土匪などと呼ばれる民間秘密結社の構成員、一般社会の外部で自分たちの運営原則や組織体系を維持する集団としての遊民である。彼らの存在は江湖に「曖昧模糊とした包括性」或いは「神秘的な雰囲気」を与えた。

実際彼らの凝集力は非常に強かった。また一般的な社会規範とは異なる集団の運営原則を持ち、日常言語以外に集団内部の隠語で意志の疎通をはかっていた<sup>9)</sup>。彼らのこうした存在様式は自発的なものであると同時に、不可避の選択でもあったが、いずれにせよ彼らは一般人とは異なる別の世界に生活するようになった。彼らの世界は一般人とは異なる領域に構築されたため、両者の間には誤解或いは想像が生み出される。彼らは警戒の対象になっていく一方で、憧憬の対象にもなっていった。これは他者あるいは異国的な対象に対する認識によくみられる矛盾であるが、自然な感情でもある。一般人たちと違う生き方、現実世界を支配する法制や道德倫理などから脱して、独特の集団運営や生活様式を有する彼らの存在はあこがれの的になっていた。

これは彼らが現実的な世界以外の世界、つまり危険や風波が存在するが、神秘的で不可解でもある江湖に対して熱望を託すようになったことを意味している。つまり、遊民集団から江湖という言葉が導出されたというより、江湖という既に存在していた世界認識の表現が遊民集団という具体的な対象に出会い、それらを表す代名詞として使われ始めたのである。

市井の占師、医者、武術家などを「江湖術士」、「江湖郎中」、「江湖芸人」などと称したのは、包括的で抽象的な意味の江湖を俗化するためであったが、にもかかわらず、この俗化された意味の江湖は中国で代表的な江湖の概念の一つとして位置付けられてきた。一般的に俗化された意味の江湖は「黒社会」の隠喩としてよく使われるが、ここでの「江湖」は「風波」や「陰悪」といった意味合いが濃いのである。しかし、義理の重視、血盟式の派閥の糾合、英雄崇拜など、遊民集団の情緒や行動とも重なるため、江湖は決して単なる

<sup>8)</sup> 紅葦『体験江湖』、上海三聯書店、2000年、2～5頁。

<sup>9)</sup> 遊民集団の生活様式、結盟方法、組織の再編、そして彼らの独特な言葉については『江湖』37～49頁、52～61頁、64～74頁を参照せよ。

悪漢や無頼漢の世界だけに限定されることはない。これは遊民集団に対する一般人たちの矛盾した感情に関わると同時に、江湖という世界或いはその世界認識自体にも内包されているものなのである。つまり、江湖は具体的な集団あるいは世界を越えて存在する集団や世界といっそう密接な関わりを持っている。したがって、今では俗化された意味の江湖が、江湖に対する代表的な表象となっているが、それはけっして江湖を代弁するものとは言えないのである。このことは江湖の実体がある種の想像の中に存在していることを意味している。

### 3) 侠客の活動空間としての江湖

陳平原は江湖の具体的な外形を「黒社会」的なものから探ろうとした<sup>10)</sup>。これは決して誤った試みではない。ただし、それが江湖の全体像として認識されるのは誤りである。江湖が地理的概念、政治的記号、世界認識、「黒社会」の表現として使われていたことについては既に述べたが、江湖に対するこのような認識は、ほぼ同時に存在し、相互補完的な関係を有している。しかし、ある瞬間或いはある契機を境に江湖には他の異なる認識を圧倒するほどの大きな指示内容が加わるようになった。それは「侠客の活動空間」である。

「侠」という言葉が最初に登場されたのは、戦国時代の『韓非子』であり、当時の名称は「遊侠」である。そしてこの遊侠の性格や形跡は司馬遷の『史記』の「遊侠列伝」のなかで具体化された。信義を重んじ、果敢に行動し、身を顧みずに人を救い、謙譲の美德を所持する者を、司馬遷は「遊侠」と称した。その後も「侠」は「豪侠」、「義侠」などの形態へと変化していった。陳平原は歴史上「侠」に関する記述が三つの段階を経てきたと主張する。つまり、『史記』の「遊侠列伝」を代表とする「実録の段階（両漢時代）」、遊侠詩を代表とする「抒情の段階（魏晉から盛唐）」、豪侠小説を代表とする「幻想の段階（中晩唐）」である。実録段階の侠客のイメージは現実世界からそれほど遠ざかっていない。侠客のイメージが英雄化、記号化されるのは抒情段階で明らかに増えているが、ここで重要な役割を果たしたのは詩人たちの想像である。幻想段階では想像と虚構が中心であるものの、侠客には再び血と肉がつけられ、現実感が与えられる。この段階の唐代伝奇の作家たちは実録という外套を脱ぎすてようとしなかった。彼らは虚構的な物語を具体的な歴史背景のもとに配置し、さらには歴史的人物などを登場させ物語の出所を提示することを通じて、侠客に関する虚構的な物語を根拠ある仮像の中に創りだしたのである<sup>11)</sup>。

ここで陳平原が目にしたのは、『後漢書』以後侠客が歴史家たちの視野から徐々に離れて、侠客を表現する主体が歴史家から詩人、小説家、劇作家などへ移っていったという点である。こうして侠の観念は創始期の歴史的な具体性から脱皮して「侠気」、「侠骨」、「侠節」などと表現される精神或は気質に転化されていく。陳平原は「侠」の実体性の究明より叙事化され表れた形態としての「侠」に注目したのである。それから彼は近代武侠小说中の「侠」は歴史上存在した実体ではなく、歴史的記録と文学的想像の融合、社会的規定と心理的欲求の融合、当代的視野と文類的特徴の融合であると主張する<sup>12)</sup>。

江湖の主体としての侠は、具体的な歴史実体に由来するが、文学的想像という過程を経

<sup>10)</sup> 陳平原は宋元時代の講談本の強盗、「黒話（隠語）」、「蒙汗薬（しびれ薬）」、「人肉饅頭」などを江湖の最初の具体的な表現であると主張した。詳しくは陳平原前掲書 133～134 頁を参照せよ。

<sup>11)</sup> 陳平原前掲書、23 頁～24 頁。

て一種の観念に変わっていく。そして文学的想像としての侠は、虚構的、想像的性格を所持するにもかかわらず、というよりもむしろその虚構的、想像的な力によって、中国の歴史や伝統文化或は思想の表象の一つとして生まれ変わる。こうした「侠」に関する認識を踏まえて再び「江湖」を分析していこう。

実際、江湖はそれが「江湖」と命名されなかった時さえ江湖と認識されていた。これが可能になったのは「侠客の存在」である。「侠客の存在」は、具体的な歴史実体を超えたもので、侠客の行為や気質、彼らが引き起こす事件までをも内包している<sup>13)</sup>。江湖という世界を侠客や彼らの行為・事件などと関連して理解するなら、江湖に関する描写や言及は陳平原の主張よりもいっそう包括的なものとなり、さらに以前から存在していたことになる<sup>14)</sup>。

そして、人々の江湖に対する具体的なイメージが固められていく過程で、最も重要な文学作品となるのが『水滸伝』である。『水滸伝』の中の「梁山泊」自体が「江湖」のごとく地理的特徴を持っている。また、108人の英雄たちも危険で不安を引き起こす存在でありながら、一般人に持たない義侠心や勇気を持ち、一般世界の束縛から脱して自分なりの生活を送っている。『水滸伝』は侠客と無頼漢の性格を併せ持つ主人公を登場させることで、江湖の一般的なイメージを作り出すのにもっとも重要な役割を果たしたと言えるだろう<sup>15)</sup>。

中国正統文人たちの政治的な記号としての江湖であれ、不安と神秘、危険とミステリーに満ちた世界に関する認識としての江湖であれ、侠客たちの活動空間としての江湖であれ、江湖に対する認識はいつも文学的想像の中で形成されてきた。政治的抱負を実現する廟堂という空間から疎外された文人たちによって、江湖は具体的な実体を持たない空間或いは概念として詩化された。また、侠客と称すべき人物たちが自分の強大な能力を用いて任侠の活動を行う江湖はもちろん、彷徨する遊民集団の生存空間である江湖もまた具体的な実体を有するが、それは劇化された場である。こうした点からみると、江湖は一種の「文学的想像物」である。これは江湖が文学作品の中のみ存在するという意味ではなく、江湖自体が文学的な想像物であり、現実的に確認される以上に豊富で、より神秘的に「想像」されるものであることを意味している。江湖はそれを認識、想像する者の中で、各自それぞれの形で形象化されるが、それらが江湖という範疇に属するのは江湖が絶えず想像し続けられるものだからである。

#### 4) 想像としての江湖

江湖は文学作品の中で具体化、可視化されると同時に、それを題材とした数多くの文学作品を創り出した。江湖は一種の文学行為の産物、つまり文学的想像の産物でありながら、

<sup>12)</sup> 陳平原前掲書、2頁

<sup>13)</sup> 劉若愚『中国之侠』、上海三聯書店、1991年、4～6頁。

<sup>14)</sup> 陳平原は『紅線傳』には「江湖」という言葉が出現したにもかかわらず、江湖に関する具体的な描写がないと述べているが、『紅線傳』で江湖は紅線という人物の履歴と彼女が行う超人間的な能力や行為を通じてあらわれている。例えば、彼女が前世においては男性であり、神農の医書に精通し、現世では一夜で700里を走り、警備が厳重である節度史の寝室に潜入して金箱を盗み出すという神出鬼没の姿の中に、江湖が存在している。

<sup>15)</sup> 陳宏、張旺、陳千里、前掲書、16頁。

同時に文学行為や文学的想像を促進する力でもある。このような江湖を中心とした文学的循環の中で江湖にはいつの間にか簡単にはまとめられない内容や夥しい意味が与えられ、それが巨大な威力を発揮している。つまり、江湖は虚構的な再現物——具体的な指示物というよりは想像された形態——という意味での「文学的想像物」という規定を超えていくのである。ここではベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」とラカンの「想像界」の概念に基づいて、これを「想像としての江湖」と称したいと思う。

ベネディクト・アンダーソンは民族を「想像の共同体」という言葉で定義する。彼は封建王朝国家が衰退し、資本主義が発展する時期に出現する特殊な文化的人造物としての民族や民族主義が創造され、成立したあとで、愛国主義、帝国主義などの論理がそれに結合して、その構成員たちにアイデンティティが与えられると主張する。

ナショナリティ、ナショナリズムといった人造物は、個々別々の歴史的諸力が複雑に「交叉」するなかで、十八世紀末にいたっておのずと蒸留されて創り出され、しかし、ひとたび創り出されると、「モジュール」となって、多かれ少なかれ自覚的に、きわめて多様な社会的土壌に移植できるようになり、こうして、これまたきわめて多様な、政治的、イデオロギー的パターンと合体し、またこれに合体されていったのだ<sup>16)</sup>。

アンダーソンの説明によれば、「民族」は近代という特殊な時代に生まれたものにもかかわらず、以前からずっと存在してきたかのような認識を流布させ、対外においては排他的で、対内においては同質感を生み出す共同体として想像されるのである。ナショナリズムの起源と流行に関するアンダーソンの「想像」は二つの次元で複合的に行われるといえる。一つは民族という観念を想像すること、もう一つは「想像された」民族という観念の中に構成員でない人々を包括し、その構成員であると想像することである。後に民族の構成員になる人々は「想像されたもの」の「想像」を通じて生み出され、存続させられる。この想像の結果、「虚偽の認識（「共同体」が以前からずっと存在してきたという認識と、その構成員たちが同質的で、一体であるという認識）」が生まれるのである。ここで「虚偽」という修飾をつけて表現された「認識」自体が一つの「想像」である。しかし、この「想像」はラカンの「想像界」の概念に基づいたものである。

ラカンは人間の主体或は自我の成り立ちの過程を三つの段階——現実界、想像界、象徴界——に分けて論理的に説明した。このなかで、想像界は「鏡像段階」とも表現されるが、それは幼児が生後六ヶ月から十八ヶ月において、鏡に映った自分の像を自分であると認識（想像）して、強烈な喜びを経験することを指す。この幼児は「私」の鏡像と自分と相貌の似た他の子供を識別できず、他者に想像的に同一化してしまう。つまり、人間は「私ならざるもの」を「私」と誤認することによって「私」を形成するのである<sup>17)</sup>。ここでの「想像」という言葉は誤解あるいは錯覚という意味を内包する。だから、上述した想像されたものが創り出す認識（想像）——自身は以前から存在した何かの継承、延長であり、したがって自身が以前から存在したという確信、またその構成員たちは同質的で、一体である

<sup>16)</sup> ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』、白石さや・白石隆訳、NTT出版、1997年、22頁。

<sup>17)</sup> 難波江和英、内田樹『現代思想のパフォーマンス』、光文社新書、2004年、313～322頁。

という確信——は誤解と錯覚としての想像である。

アンダーソンの想像とラカンの想像界の概念は「江湖」の意味を理解するのに非常に役に立つ。「江湖」が具体的な実体から始まり、文学的な想像過程を経て一つの「文学的想像」へと発展したことは既に説明したとおりである。「江湖」は具体的な実体とそれに関する観念が複雑に結合したものであるが、重要なのは「江湖」が一種の「観念」として存在するという点である。「観念」として存在するからこそ、「江湖」は想像過程を通じて概念やイメージを外延的に拡張し続けられるし、ある時は既存の概念やイメージを転覆するものまで自らの意味体系に包括しうるのである。

こうした「想像としての江湖」を最も顕著に表現したのが武俠小説である。

### 3. 武俠小説と江湖

#### 1) 武俠小説の概略

一般的に、武俠小説の始まりは、1923年、世界書局の社長である沈子方の提案によって向愷然が平江不肖生という筆名で書いた『江湖奇俠傳』であるとみなされている。それ以後、1949年に成立した中華人民共和国が武俠小説の創作と販売を禁止するまで、中国全土で興隆した武俠小説を旧武俠小説と呼び、1950年代以降に、香港や台湾で書かれた武俠小説を新武俠小説と呼ぶ。

武俠小説の起源についてはそれ以外にも諸説ある。そのなかで武俠小説を『史記』の「遊俠列伝」、「刺客列伝」に始まる俠義類叙事の継承或は変形だと認識する説は、武俠小説というジャンルの内在的な属性を蔑にする傾向がある。武俠小説はそれ以前の俠義類叙事と同じ文学的淵源を持っている<sup>18)</sup>が、両者には明らかに異なる属性がある。

武俠小説の最大の特徴は、武芸やそれに基づく対決場面を非常に詳しく描き出したことにある。『水滸伝』など武俠小説以前の俠義類小説にも武芸や格闘に関する描写は存在したが、それらは武俠小説とは比較にならない程度である。武俠小説に登場する武芸は現実のものをもとにしているが、相当部分、作家の想像力によって再創造されたものである。そして、そうした武芸は武俠小説の世界を構成する重要な装置としての役割を果たしている。少林、武当、崑崙、峨嵋などは自派の固有の武芸をもとに江湖の重要な門派<sup>19)</sup>として登場し、そのほかにも無数の幫派が武俠小説を通じて新しく誕生した。こうした様々な門派で構成された世界が武俠小説の江湖である。これは武術的な虚構世界である。

武俠小説中の侠客たちはそれぞれ固有の武術を用いて、個人や門派の敵討ちのために、あるいは武術の秘籍や秘蔵の宝物を探索するために旅立つ。武俠小説における武術は江湖を構成する重要な装置であり、武俠小説ならではの楽しみをもたらすが、それがストーリー全体の展開に大きな影響を与えることはない。むしろ、武俠小説の内容は、ヒーローとしての侠客の物語、ミステリー事件の解決、あるいは美女とのロマンスと結びついている。

<sup>18)</sup> 武俠小説の基本構成要素である「江湖」と「俠」は、中国戦国時代の俠義類叙事、及びその後の唐代の伝記、宋代の話本などにずっと存在した「江湖」と「俠」を原型としている。

<sup>19)</sup> 江湖を構成する各流派を、武俠小説では「門派」と称する。仏教の「少林派」や道教の「武当派」をはじめ、青城・峨嵋・崑崙・華山など、名山の名を冠した「××派」はしばしば五大門派・九大門派などと称され、江湖を代表するエリート武術集団とされている。

しかし、多様なストーリーが武俠小説と結合されているにもかかわらず、それは常に「武俠小説」と呼ばれる。つまり、武俠小説は様々なジャンルのストーリーを「吸収」しているのだ。たとえば、金庸の『神雕俠侶』において楊過と小龍女のロマンスがいくら重要であっても、それはロマンス小説ではなく、あくまでもロマンスが大きな比重を占める武俠小説にすぎないのである。これは武俠小説の特性——武術の重視と江湖の構成など——に備わる強力な力のためであると思われる。

「武術の全面化」が武俠小説の叙事様式を構成する最も基本的な特徴であり、武俠小説の非常に顕著な弁別的要素だとすれば、時代的な状況は武俠小説というジャンルの内面的正体を示唆する内在的な要素である。武俠小説の作家や読者が近代国家の「国民」の身分であったという事実は、武俠小説の基本的な属性を理解、解明するのに非常に重要な入口である。これによって、武俠小説は二つの次元からの検討が可能になる。一つは「近代（Mordern）」という時間性からの検討であり、もう一つは帝国主義との関連性からの検討である。もちろん両者は互いに深い連関がある。

1920年代から1930年にかけて民族主義的傾向の強い武俠小説を次々発表した文公直は、武俠小説の読者たちを五族（漢、満、蒙、回、蔵）或は大中華民族という言葉で称し、自分の読者たちが武俠小説を読むことを通じて大中華民族としてのアイデンティティを固めることを願った<sup>20)</sup>。ここで文公直が大中華民族のアイデンティティを唱えた理由は東西列強の逼迫のためであった。これは武俠小説の創作や消費に帝国主義列強の暴力的侵略という清末以降の現実的状況が強く影響していることを示す例である。もちろんすべての武俠小説がこうした現実に対する意識的な自覚と関係しているとは言い切れないが、こうした例は武俠小説が新しい創作の意図や状況に依存していたという事実をあらわすには十分である。

実際武俠小説の初期の作品である平江不肖生の『近代俠義英雄伝』は帝国主義に対抗して戦った民族（中国）的英雄の物語を描いているが、こうした内容は武俠小説が選ぶ主要な題材の一つであった。常に存在した帝国主義の脅威は中国人たちに、それに対して現実的、実践的な対抗方法を模索するよう求めたが、一方それに想像的に対応する方法も模索させた。ここで強化されたのが「中国人」たちのアイデンティティに関する認識である。

武俠小説に関わる時間は大きく二つに分けられる。一つは、武俠小説が扱う時間——過去の時間——であり、もう一つは武俠小説が創作、消費される時間——近代の時間である<sup>21)</sup>。この二種の時間の存在は武俠小説と俠義類叙事との差異を表わすもう一つの指標である。俠義類叙事のこの二種の時間は中国古代の伝統的時期に属する過去だと言えるし、この意味で俠義類叙事は同時代の叙事だともいえるだろう。一方武俠小説に関わるこの二種の時間——過去と現代——には無視できない間隙が存在する。またこの間隙はただ時間的な意味を有するだけではない。それは伝統的中國の終わり新しい時代の始まり（むろん、この間には帝国主義の侵略が介入している）という大事件を内包する。武俠小説はこの大

<sup>20)</sup> 範伯群主編『中国近現代通俗文学史 上』、江蘇教育出版社、1999年、622頁。

<sup>21)</sup> 黄錦樹はリアリズム小説と武俠小説の再現の差異を分析し、これを通じて武俠小説のジャンルの属性を把握しようとしたが、ここで重要な指標の一つになったのが時間性の運用に基づいた再現方法の相違である。黄錦樹「否想金庸—文化現代的雅俗・時間與地理」、『98 金庸武俠小説国際学術研討会論文集』、遠流出版社、1999年、596～597頁。

きな間隙を越えて、過去を現在に召喚する。武侠小説を通じて現在に召喚された過去は「ありのままの過去」ではなく、「そうだったのだろうと信じたい過去」、つまり「想像された過去」である。こうした意味で、武侠小説は過去を召喚するのではなく、想像するのである。そして、過去の中国に対する想像は武侠小説の世界——「江湖」——として顕在化される。この世界は時折現実的な様相を呈するが、同時に幻想的、超越的な要素を内包する時もある。多様な存在の様相にもかかわらず、「江湖」が意味するのはわりあい明白である。それは、「江湖」が「武」や「俠」などを中国の伝統文化と結合することによってあらわれる。「江湖」は実際の中国と想像の中国の混合と錯綜から構成されているが、大事なものは「江湖」が想像された中国を志向し、絶えず中国を想像するということである。

優れた武術の所有者（侠客）と彼らが奇想天外の武術を用いて対決する世界としての江湖は武侠小説を要約する二大要素である。つまり、武侠小説とは「江湖」で行われる「侠客」たちの物語にすぎない。武侠小説はこの二つの要素を全面的に消費する一方で新しく創り出すのである。江湖は無数の反復と変化を通じて持続的に想像されるが、その過程で江湖は単なる武侠小説の背景以上の意味を有することになる。

## 2) 江湖——武侠小説の世界

武侠小説の時空間的背景については、概ね「近代以前の中国」と考えてよいだろう。武侠小説の固定的な時空間的背景を確定することはできないが、時間的には大体清末までの時代であり、空間的には西域、西夏、東北の白頭山など現在の中国領土内部が主な舞台になっている（場合によっては例外もある）。つまり武侠小説の時空間的背景は「昔々の中国」ということになるであろう。ところが、武侠小説の背景は時間的なものであれ、空間的なものであれ、作品中ではあまり大きな意味を持たない。なぜなら、武侠小説中で、背景である時間や空間がそれにふさわしい描写や表現を提供するとは思われないし、背景が舞台装置以上の意味を持つことはないからである。武侠小説は時代的な特徴や社会的な状況に関する描写や表現についてはあまり関心を払わないのだ。

これは武侠小説が歴史事件を扱うときにも同様である。武侠小説は歴史事件の意義を探ることや、その事件を反省することには関心を示さない。これこそ武侠小説が歴史小説と異なる点である。したがって、武侠小説が宋代、明代、清代などを背景にしているとしても、そこに登場する人物たちの差異——宋代には契丹族、明代にはモンゴル族、清代には満族などが登場して重要な役割を演じたという差異——以外には、各時代の特徴や差異は見つけることはできない。これは歴史時期を扱うはずの武侠小説が、「歴史」を扱うのではなく、主に「江湖」を扱っているからである。つまり、武侠小説の時空間は「江湖」によって再配置され、そうして構成された時空間は「江湖」にほかならないということである。この意味からすると、江湖は単なる武侠小説の背景ではなく、武侠小説の世界そのものを指すのである。武侠小説の中の江湖は武侠小説が解釈、想像、構成する世界なのである。

武侠小説のジャンルの特徴——武術に基づいた格闘に関する詳細な描写——は江湖という独特な世界のなかで現れる。現実世界では見られない様々な武術が登場し、これを自由自在に駆使する達人たちが対決する場面は、江湖では日常茶飯事である。ところで、江湖は非現実的で虚構の世界であるにもかかわらず、それ自体の規則を有している。舒治国

が「金庸的武芸社会」の中でまとめてあるいくつかの「江湖の規則<sup>22)</sup>」は金庸の江湖だけのものではなく、大多数の武俠小説家たちが認める江湖の一般的な規則である。

「江湖の規則」は武俠小説のストーリーのなかでは、禁忌或いはゲームのルールとして作用しているが、それに違反することはストーリー展開の重要な契機になる。また「江湖の規則」の存在により江湖世界の独自性と自立性が強調される。この独自性と自立性は、陳平原が言う「官庁の世界」との対立から生まれるものではない。陳平原は「武俠小説の江湖世界は官庁の世界とともに、世界を二分化する第二の社会である<sup>23)</sup>」と述べているが、その場合、江湖は武俠小説で形象化される世界の一部に縮小されてしまう。しかし武俠小説の世界は江湖そのものであると指摘したように、江湖は決して武俠小説の単なる一部分を構成するものではない。武俠小説を構成する江湖は、武俠小説を他のジャンルの小説と区別させるだけでなく、それを現実世界とは全く異なる「想像」の世界として成立させる。江湖の独自性と自立性は現実世界の性質と対立している。この点を強調するのは、武俠小説を構成する世界がその特異性にもかかわらず、あるいはその特異性に促され、現実に対する代替欲望と結合し、「彼岸的現実」の想像へとつながって行くからである。

『水滸伝』の梁山泊に具体的な形を現わす江湖は、それ自体がユートピアと反ユートピアの二重性格を有している。混濁した無気力な国家権力に対立する理想社会、正義を代表する侠客たちの行為が江湖のユートピア的な様相を表すものとしたら、暴力と陰謀に満ちた険悪な空間、不正な欲望によっておこる風波は江湖の反ユートピア的な一面である。しかし、江湖にそうした反ユートピア的な要素が含まれているにもかかわらず、武俠小説はユートピアを志向している。宋偉杰はこれを「ユートピア衝動」という言葉で表現している。ポール・リクールによれば、ユートピアは現実を排斥する批判的な手段でありながら、同時に現実から抜け出す避難所である<sup>24)</sup>。武俠小説の江湖も一つのユートピアとして、過去の歴史と現実への介入とそこからの逃避を同時に行う。武俠小説の江湖において、過去は破損と欠乏の空間、秩序の消失した空間として設定され、武俠小説ではそこに新しい秩序を与え、破損と欠乏を補おうとする試みが繰り返される。こうした試みは過去に対する批判的な再生産である一方、過去に対する忘却でもある。先に武俠小説は近代中国の歴史的な傷痕と関係があると指摘した。武俠小説は江湖を通じて過去を繰り返し、変化させ、再生産するが、この時の江湖は過去に対する批判、秩序の補完である同時に、過去に対する忘却でもある。つまり、江湖を通じて過去や中国に対する「想像」が生じ、この「想像」がその真偽の如何にかかわらず、現実や未来に対し強い影響力を発揮することになるのである<sup>25)</sup>。

実際、江湖に関するあらゆる想像はある種の欲求や念願と関わっている。この欲求と念願は江湖を想像させ、想像された江湖を実在と錯覚させ、混同させる。そして、こうした

<sup>22)</sup> 許可なしで他者の武術を望み見ながら学んではいけない、武術人は信義を最も重んじる、正と邪は両立できない、男女は平等であるなど。詳しくは舒治国「金庸的武芸社会」、『金庸茶館2』、中国友誼出版社、1998年、129～135頁を参照せよ。

<sup>23)</sup> 陳平原、前掲書、147頁。

<sup>24)</sup> 宋偉杰『從娛樂行為到烏托邦衝動—金庸小説再解讀』、江蘇人民出版社、1999年、60～64頁。

<sup>25)</sup> 前節で言及したように、江湖に対する想像には誤解と錯覚が必然的に介入する。したがってこの過程で虚像による実像の代替が行われるが、重要なのはそれが虚像にもかかわらず、それを実像として信じようとする熱望によって、現実的な影響力を発揮してしまうことである。

江湖は、過去の中国の歴史と文化を再構成したり、中国人たちのアイデンティティを強化したりする力を発揮する。

## 結論

武俠小説はそのジャンルがもつ独特の性質によって、少なくとも中国或は中華圏においては、一般的な大衆小説や商業小説以上の意味や効果を持っている。なぜなら武俠小説は近代以降、巨大な社会的、歴史的な変化により心の痛手を経験せざるをえなかった中国人たちを刺激し、それを想像的に克服する対案を提示する一助となったからである。つまり、近代から現在に至るまで、中国人たちは、帝国主義の侵略、新しい国家の成立、内戦による激甚な混乱や中国の分裂などの事件を直接経験するか、或はその影響下に存在したことになる。それによって起きた中国人たちの最も大きな変化は、身分の変化であった。彼らは大陸人、香港人、台湾人、海外華僑という身分としてそれぞれ分離された。こうした状況で、武俠小説は敵味方の間の対決構図を創り出し、それが味方の勝利で結着するという形式で、中国人たちの記憶の中に残されている敗北意識や痛手を想像的に治癒しようとし、そして過去の中国の文化を描き出すことによって、中国人たちにアイデンティティを想起させようとした。中国大陸から離れた中国人にとって、武俠小説の創作や消費による中国に対する回想と想像は、時間・空間・政治的な距離の有する意味を無化するための努力であると考えられる。彼らが中国を想像し、そうした想像を通じて占有＝獲得しようとしたのは「統合された中国」であり、「中国人」としてのアイデンティティである。彼らは、香港、台湾で「新中国<sup>26)</sup>」ではない「中国」を希望、念願したが、これは彼らに与えられた特権でもある<sup>27)</sup>。むろん彼らが想像し出した「中国」は、もはや彼らだけのものではなく、全「中国人」たちの共同所有物になった。今日においてこれは、「中国」の想像が政治的な意味を超える行為になっていることを意味している。中国人にとって、武俠小説の創作や消費は娯楽的な行為の次元で行われているが、無意識的にはそれを越えている。

武俠小説が想像する中国は、過去の歴史の中の中国に代わるための想像的な中国であり、その想像のために利用したのが「江湖」である。しかし、武俠小説の江湖は、従来の認識である文人たちの政治的な記号、世界認識の表現、周辺部の社会などとしての江湖とは異なっている。それらは詩化あるいは劇化された形態として表現された、一つの文学的想像としての江湖である。武俠小説はこうした文学的想像（実体を越えた一種の観念）としての江湖を借用すると同時に、それらを持続的に反復・変化させることによって、「中国」を想像した。

ここで注目すべきなのは、その「想像された中国」が一種のイメージを越えて、過去の実在の中国を代替する効果を発揮するという点である。これが「想像としての江湖」が発揮する威力である。つまり、江湖は「想像されたもの」であるにもかかわらず、過去に存在した実体と同一視され、巨大な威力を発揮する。江湖が想像されたものではなく元々中国に存在したものだとして、そして武俠小説の「想像された江湖」と実在した江湖が同一のも

<sup>26)</sup> 1949年以降の社会主義中国

<sup>27)</sup> 中華人民共和国が成立してから、大陸での武俠小説の創作と出版が全面的に禁じられ、1980年代解禁までの武俠小説は主に香港と台湾で創作、出版、購読された。

のだと思ひ込むのは、それを中心として想像された中国と過去の實在の中国の關係を曖昧にし、過去の實在の中国が想像された中国に代わることになる。こうした想像を可能にしたのは、近代以降中国人たちの思考の中に潜在している歴史的な傷痕や挫折感と、それをも克服しようとする彼らの模索や努力であった。

言い換えるなら、武俠小説の江湖は實在の中国に対する鏡像である。武俠小説の中の想像された中国によって實在を代替しようとする中国人たちの試みは、彼らを鏡像段階あるいは想像界の中の幼児と同様な境遇に置かせるのである。

武俠小説が中華圏で人気を博したのは、それが生み出す彼岸的な中国がその虚構性にもかかわらず、中国人たちに深い印象を残したためである。これが「想像としての江湖」が発揮する威力である。

#### 参考文献

##### 日本語の文献

- 岡崎由美『漂泊のヒーロー—中国武俠小説への道』、大修館書店、2002年  
神奈川大学人文学研究所編『歴史と文学の境界』、勁草書房 2003年  
ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』、白石さや・白石隆訳、NTT出版、1997年  
難波江和英、内田樹『現代思想のパフォーマンス』、光文社新書、2004年  
福原泰平『ラカン—鏡像段階』、講談社、1998年  
西村伸宏「中国大陸における金庸をめぐる諸言説の分析」『国際文化研究紀要』第13号 2006.12

##### 中国語の文献

- 陳平原『千古文人俠客夢』、人民文学出版社、1992年  
林凌翰「文化産業與文化認同—論金庸武俠小説呈顯的植民地处境」『文化想像與意識形態』、牛津大学出版社、1997年  
陳宏、張旺、陳千里『江湖』、百家出版社、2002年  
陳思和『二十世紀中国文学論』、青年社、1995年  
黄錦樹「否想金庸—文化現代的雅俗・時間與地理」、『98 金庸武俠小説国際學術研討会論文集』、遠流出版社、1999年  
紅葦『体験江湖』、上海三聯書店、2000年  
劉若愚『中国之俠』、上海三聯書店、1991年  
宋偉杰『從娛樂行為到烏托邦衝動—金庸小説再解讀』、江蘇人民出版社、1999年  
嚴家炎『金庸小説論稿』、北京大学出版社、1999年